



第7回寄贈品展 「時をつなぐモノたちの声」

12月7日(土)～2020年1月25日(土) ※最終日は15:00まで

時代が令和に移り昭和がさらに遠くなりましたが、戦争があった時のモノの声を聴いてみませんか。今回はこの6月までの1年間に寄贈いただいた290点を展示します。主婦が日頃使用した日用品や家計簿、学徒動員時に身に着けた認識票、「7つボタンは桜に錨」の予科練制服、愛知時計電機作製の木製プロペラ、1945年通信隊で広島原爆投下を事前受信した体験手記、私設の神風特攻後続隊入隊許可證、徴兵保険証券、尋常小学校教科書と高等女学校教科書及び少年向け戦争小説等々があります。

初日のオープニングイベント(11時～)では寄贈者の方々に来館していただき、当時の体験や寄贈品などについてお話をうかがいます。寄贈品の一つ一つから戦争の一端を知っていただければと思います。



〈寄贈された資料から〉

海軍予科練冬制服
胸の7つボタンに錨のマーク



木製プロペラ(全長3.9m)
愛知時計電機で作られた
水上偵察機用プロペラ

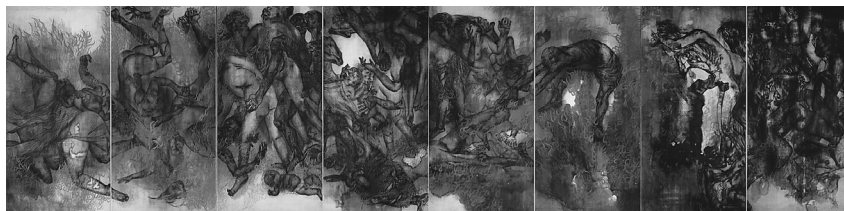
展示の準備が進んでいる



ピースあいち企画展 原爆の図と大津定信展—核兵器のない世界のために

2020年2月4日(火)～3月28日(土) ※最終日は15:00まで

「ピースあいち」の原爆の図展としては5回目となる企画展。今回は《第2部 火》です。描かれているのは火に包まれる人々—崩れるように倒れた女性、赤ん坊を抱いたまま倒れた母親、逃げ惑う人々、道端に転がったようにして目をつむる赤ん坊、這いつくばる老女、誰かを助けようと足を引っ張る老人、画面いっぱい描かれた人々を炎が包んでいます。



そして、名古屋市在住で画家・書家の大津定信さんの作品も展示します。大津さんは2001年の米国同時多発テロの翌年にニューヨークを訪れてから、「原爆は人類最大のテロではないか」と考えるようになり、その後、広島や長崎、沖縄を題材にした作品を描いてきました。広島の爆心地近くの土や大田川の砂、平和公園の樹木でつくった炭などを使った独自の技法で、原爆の悲惨さを表現。そのなかから、「黒い雨」など広島、長崎、沖縄をテーマにした5つの作品を展示します。



(上)丸木位里・俊 原爆の図《第2部 火》180×720cm、原爆の図丸木美術館蔵。大津定信作品(左)ヒロシマ、ヒロシマ、ヒロシマ(194×162cm)、(右)黒い雨(194×130cm)

さらに、核兵器を巡る世界の現在の状況に目をむけます。2017年に核兵器禁止条約が国連で成立し、同年のノーベル平和賞をICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)が受賞しました。核兵器禁止条約は核兵器のない世界をつくることができるのでしょうか。核兵器禁止条約の解説パネルを展示します。

【入場料】 大人600円、小中高生200円(入館料を含む)
【関連企画】

- 講演会 「核兵器禁止条約で世界は変わるか?」
日時 2020年2月8日(土)13:30から
講師 川崎 哲さん
(ピースポート共同代表、ICAN国際運営委員)
参加費 大人500円、小中高200円
(入館料、入場料のほか必要です)
- ギャラリートーク
定員 70人(電話予約が必要です。1月7日より受付開始)
原爆の図丸木美術館学芸員岡村幸宣さんと大津定信さん
日時 2020年2月29日(土)13:30から
※入場券で参加できます。



報告 ピースあいち特別展「水木しげるの戦争と新聞報道」

7月16日(火)～9月1日(日)

天井から床まで垂らしたコーナーバナーで仕切られた会場に、所狭しと並んだ漫画や新聞、写真パネルなど約100点。水木プロダクションの巡回展の内容に、「ピースあいち」の独自色も加えました。子ども向けにQ&A形式で作成したガイド冊子は、見学の助けになると大人にも好評でした。「アジア・太平洋戦争とは?」「南方戦線とは?」などの解説で常設展に関連付けて、戦争の全体像を見てもらうようにしました。戦時中は複数あった新聞が1県1紙に統合されていった地元紙コーナーを工夫して設えました。水木二等兵を模して再現した南方戦線陸軍兵士軍装のマネキンも置きました。

会期中の来館者は3117人。一日で300人を超す日もありました。



◆感想アンケートをご紹介します。戦場を体験した伝え手がいなくなって今、水木さんが自分の役割だと描きだした漫画は、幅広い世代に響きました。

○戦争の真ん中で、生死の崖っぷちで生きぬいた人間の本当の姿を改めて知ることができました。戦争を描いた水木マンガと手記からリアルさが伝わってきました。戦争はダメの気持ちを深く深く感じ取らせてもらいました。(70歳男性)

○日本の軍の被害は少ないと報道されていたのに本当は多いということを知り、どうして嘘をついたのだらうと思いました。(11歳男性)

○本当の戦争の姿を知ることができました。現実と報道の違いには落胆しますが、これが本当の日本の姿だったのだと感じました。(42歳女性)



中部日本新聞(現中日新聞) 1942年1月1日～1945年8月16日の展示コーナー



講演会「妖怪ぬりかべと水木しげるの戦争体験」(8月17日)の会場は満席。お話は蛸島直さん(愛知学院大学文学部教授・民俗学)

◇講演会「父 水木しげるの戦争を語る」原口尚子さん 7月20日(土)

召集令状が来て徴兵され、送られたのは激戦地ラバウル。そこででの過酷な体験や、軍隊生活をどこかユーモラスに書いた『娘に語るお父さんの戦記』に沿ってたどるお話でした。参加者は70名。実はこれまで講演会をした事がないという原口さんでしたが、「戦地で誰に見られることもなく死んだ者への思いが強かった」「3年間の戦争は漫画家人生を凌ぐ大きな記憶だった」「片腕の日常生活に不自由を感じ



させない父でした」と、家族ならではのエピソードがいっぱいでした。

最後に、水木しげるの少年時代を描いたTV番組で、のんのんばあを演じた女優の山田昌さんが登場しました。初顔合わせのお二人でしたが、水木さんの思い出話にすっかり打ち解け、会場もとても沸きました。



報告 「戦争の中の子どもたち」展

10月1日(火)～11月30日(土)

秋恒例の「戦争の中の子どもたち」展は今年、二つ展示を変えました。

一つは沖縄慰霊の日の「平和の詩」。今年、小学6年生の山内玲奈さんは、学校の平和学習で沖縄戦当時の写真を見て、戦争の恐ろしさと平穏な日常のありがたさを思い知ったといいます。この平和がいつまでも続いてほしいとの願いを込め、「本当の幸せ」とは何かと問いかけて朗読しました。その全文を展示しました。

二つ目は学童疎開の話聞いた小学5年生が描いた絵です。「ピースあいち」の運営委員である村上扶左雄さんは名古屋の正木国民学校4年生の時に三重県の豊地国民学校に集団疎開をしました。その時の体験を2016年8月、疎開先であった松阪市立豊地小学校で全校生徒181名を対象に話をしました。また、指導した先生が当時の学校日誌から掘り起こしたことを生徒たちに話しました。これらをもとにして、まず、生徒たちは疎開を演劇にして発表。その後、記録を残して次の世代に伝えようと「絵」で表現しました。脱走、イナゴ取り、開墾、養蚕、親との面会など、素晴らしい絵になっています。



報告 森下貞子の絵手紙展

9月10日(火)～10月12日(土) プチギャラリー

寄贈を受けていた額入りの絵手紙10点と「原爆の凶」を観ての『炎の中の母子』を展示しました。83歳の森下さん



「今絵手紙で残したいこと」と、タイトルの書に並ぶのは、戦時中の日常を切り取った場面です。「戦争の残酷さが優しい絵と手書きの文章で表現されることで一層心に突き刺さりました。」と来館者に感想をいただきました。

報告 水墨画で戦争の痛みを描く

～長野県の高校生の作品展

10月15日(火)～11月30日(土) プチギャラリー

長野県佐久平総合技術高校で学ぶ生徒たちが“戦争の痛み”を描いた



水墨画7点を展示しました。資料をもとにイメージした戦争ですが、墨絵と思われない迫力がありました。指導にあたった江原一幸美術科教諭は、「人の痛みを感じ取る事ができる想像力を持った人になってほしい」という思いで取り組まれたそうです。

報告 peace nine展2019

9月10日(火)～9月28日(土)

「戦争を知らない世代が『忘れてはならない戦争の悲惨』をアートという手段で語り継いでいく」という代表者の西村正幸さん。出品者18名は20代から70代。その平和への思いはさまざまで、引き寄せられたり難解であったりする。添えられたコメントやアーティストトーク(9月14日)に耳を傾けて鑑賞が深まり、作家の思いに触れた。



夏の 戦争体験語り シリーズ 2019

毎年恒例の「戦争体験語りシリーズ」が8月1日(木)から14日(水)まで開催され、「ピースあいち語り手の会」「ピースあいち語り継ぎ手の会」の方たちが、日替わりで来館者にお話をしました(最終日15日は台風接近で暴風

雨警報が発令されたため中止となりました)。連日、小学生とその親世代から戦争体験者世代まで会場はぎっしり埋まり、延べ588人の方が参加してくださいました。お話を、「ピースあいち」のボランティアが報告します。

8月1日(木) 名古屋空襲、学徒勤労働員

斎藤 孝さん
(1930年生まれ88歳)



私が生まれた翌年、満州事変がはじまった。戦時下で物資は不足するようになり、防空壕がいたる所に造られ、警戒警報が鳴ると「防空頭巾」をかぶって防空壕に避難した。昭和19年になると授業がなくなり、学徒動員で大江にある軍需工場の岡本工業に行き働いた。空襲は激しくなり、20年3月には、B29が爆弾や焼夷弾を落とし、そのたびに空襲警報が鳴った。次には清州の軍事基地で防空壕造りをさせられた。そして8月、広島と長崎に原子爆弾が落とされ、15日、天皇の「終戦の詔勅」を聴いた。翌日、名古屋に帰り見上げた雲一つない真青な空、「これが平和だ!」と思った。

8月2日(金) 満蒙開拓者の戦前戦後

平田 和香さん
(1940年生まれ78歳)



78歳とは思えない若々しくチャーミングな佇まいの女性である平田さんは、「私は語り手ではなく、語り継ぎ手です」と言われ、実に明確に満蒙開拓者の歴史や、開拓する入植地は北緯47度の寒冷地で、過酷な農地開拓を迫られた仕事ぶりなど、地図を示して説明があり、具体的で、初めて聴く者にもその労苦が理解できた。平田さんが語り継いだ人達は、愛知県の東三河の146戸の500余名が渡満した中の、9人の体験者である。その記録をまとめ、『戦前・戦後をたくましく生きねばならなかった人たち—国策満蒙開拓に翻弄された人々—』という冊子を作成した。

8月3日(土) 学童疎開、名古屋空襲

今村 實さん
(1933年生まれ86歳)



1944年12歳の時、自宅のある名古屋から安城の祖父母宅へ疎開し、その間空襲には遭いませんでしたが、12月7日の東南海地震、45年1月13日の三河地震と2度の大きな地震に遭いました。1度目は土壁が落ちてしまった昼間。2度目の地震は深夜で家は完全に倒壊、私は梁と梁の間に挟まれましたが辛うじて助かりました。しかし、祖母は亡くなりました。13歳になり名古屋に戻りましたが、今度は焼夷弾による空襲が本格的になり5月14日の空襲で名城公園近くにあった自宅は焼け落ちて、住めなくなってしまいました。名古屋城も焼けましたが、今晚どこで寝るのか途方に暮れる私には何の感慨もありませんでした。当時一緒に助かった妹も弟も既に亡くなり、思い出を話せる人がなく、寂しい思いです。

8月4日(日) 名古屋空襲—杉山千佐子 さんの体験を語り継ぐ

石川 薫さん



石川さんは語り継ぎ手として、語りと映像と朗読を織り交ぜて分かりやすく杉山さんの半生を紹介された。

杉山さんは名古屋大学医学部勤務時代の1945年3月、29歳の折、空襲で顔面に重傷を負い、左眼球を喪失した。戦後、南山大学の寮母に就いた頃、同大の教員から“戦時中の民間空襲被害者を救済する法律”の話聞き、1972年、「全国戦災傷害者連絡会」を立ち上げた。“被災者は軍人・軍属だけではない”“内地も海外の戦地と同じ戦場だった”“戦災で死傷した民間人の戦時災害を補償する「戦時災害援護法制定」は国の責務だ”と訴え、101歳で亡くなるまで運動を続けた。杉山さんらの声に政府は門前払いを繰り返した。

8月6日 (火)
広島原爆被爆

木下 富枝さん
(1936年生まれ83歳)



1945年8月6日、爆心地から1.2キロの我が家で、学校の教科書を読んでいました。一瞬外が真っ暗になり、母が頭から血を流していました。外に出ていた姉は、背中が半分燃えていた。近くに住んでいた叔父や叔母は建物の下敷きになり足が折れ、祖母を助け出すのに時間がかかった。避難した親類宅には、被爆した人々で一杯だった。そこから5キロ先の離れに住む。火傷した姉はずーっとうつぶせだったが、軍医の世話で回復した。父が家を修理し8カ月ぶりにわが家に帰った。母が心配して髪の毛を引張ったり皮膚を確認していた。59歳で亡くなった姉の葬儀の帰りに広島平和記念館に寄ったら「ケロイドの少女」として映っていた姉の後姿を発見、立ち尽くし涙が止まらなかった。

8月7日 (水)
学童疎開、神戸空襲

島村 悦子さん
(1932年生まれ87歳)



太平洋戦争開始から3年、サイパン陥落を機に本土空襲が容易となった。敵機の来襲必至を控え、学童疎開が実施されたのは昭和19年9月である。

大都市への空襲は、20年3月10日の東京をはじめ名古屋・大阪・神戸と続いた。中でも自分が国民学校に在籍し、集団疎開していた神戸は3回にわたって空襲を受け、20年3月17日B29-309機により西半分、5月11日にはB29-60機、6月5日にはB29-350機により東半分が大空襲を受けた。後々写真で見ると、すごい被災だったことがわかった。不発爆弾が防空壕に残っていたりもした。正直な気持ちとしては、87歳の今でも小学校へ入学したい。

8月8日 (木)
空襲、疎開・暮らし

高山 孝子さん
(1935年生まれ83歳)



1944年6月に疎開した。招かざる客が来たわけで、食べる物は貧しく空腹で体力・抵抗力もおち、いろいろな病気も発症した。戦争で一番辛い、苦しい思いをするのは子供と女性といった弱い立場の人たち。権力・財力・情報等がある強い立場の人はうまく立ち回っている。こんな辛い思いをする戦争は2度とおこさせてはいけない。人間には言葉がある。話し合える。広い視野を持って生きてほしい。国があって個人があるのではない。個人があって国がある。ひとりひとりの命が一番大事。再度言う、戦争をやっては絶対ダメ。

8月9日 (金)
国民学校生活

原 宜子さん
(1934年生まれ84歳)



戦争のため、尋常小学校が廃止され、軍国主義教育目的の「国民学校」が設立された。子どもらはそこへ通うことになり、それまでの生活は一変した。今までと校舎・教師は同じでも教育内容に大きな違いがあった。教育勅語に基づき、天皇を神とする皇国思想教育であった。子どもらの学校生活は、衣服は軍隊スタイル、教育内容、あらゆるところに米英敵視が込められていた。そして広島・長崎に原爆が落とされ、ついに敗戦を迎える。原さんは過去の歴史が記憶され、そこから学ばなくては過去の過ちはくり返すと、強調された。

報告 ボランティアガイド交流会

6月2日(日)・10月6日(日)・11月17日(日)

展示ガイドは「ピースあいち」の大切な活動の一つ。6月2日、日頃思っていることをざっくばらんに話し合う「ガイド交流会」を開催しました。継続を望む声が多く、10月、11月と続いて会を持ちました。11月はグループに分かれて、ピースあいちのガイドはどうあるべきか、また具体的なガイド方法について、意見を出し合って発表。とても有意義な会となりました。一人で行うガイドは毎回、「これで良かったのか」という反省があります。みんなでいろいろな課題を共有して学び合い、支え合い、より良いガイドができるチームを作っていくのが目標です。



ガイド風景

8月10日(土)
学徒勤労働員

望月 菊枝さん
(1930年生まれ89歳)

1944年、名古屋市立第三高等女学校2年の2学期頃から授業はなくなり、私のクラスは大曾根にある三菱電機へ学徒勤労働員されました。日に日に工場に対する空襲の回数が増え、校長先生の計らいにより学校で工場の仕事をすることになりました。



1945年1月23日学校が空襲を受け、私の入った隣の防空壕は爆弾の直撃で学友42名が無残な死を遂げました。壕から出るとすり鉢状に空いた穴の周辺に埋まっている腕、足、体の一部が目飛び込んできましたが、その後のことは記憶が抜け落ちています。遺体はできるだけきれいにして遺族のもとに返されたとのこと。夜ようやく帰宅することができた私を、父が「おお、助かったか」と安堵の声をあげて出迎えてくれました。

8月11日(日)
学童疎開

八神 邦子さん
(1935年生まれ84歳)

八神さんは最初に今日の中日新聞の記事「74年前、駅に子があふれ」を紹介された。「今ならお盆の帰省や旅行で駅にいると思うでしょうが、この子たちは違います」そう言って、ご自分の学童疎開の体験を話し始めた。1944年8月11日から学童疎開が始まり、最初は伊勢神宮のそばの旅館、1か月半後には寺へ移った。当時9歳、小学校3年生だった。学童疎開とは「さみしい」「ひもじい」「かゆい」の3つだった。「さみしい」は親と離れて暮らさなければならないこと。「ひもじい」はとにかく食料がなく、常に食べ物のことを考えていたこと。親が持たせてくれた胃腸薬まで食べた。「かゆい」も常に付きまとったこと。身体はシラミ、ノミに喰われ、頭はケジラミとその卵で真っ白な状態だった。



8月13日(火)
戦後、東山動物園で生き残った
ゾウに乗って

萩原 量吉さん
(1940年生まれ78歳)

戦争が終わって一番覚えているのは、ひもじかったこと。なんでも口に入れた。ヘビやカエルまでも。そのころ学校から遠足で名古屋へゾウを見に行くことになった。三重の津からゾウ列車に乗って。そして、東山動物園で生き残ったぞう(エルド)に乗せてもらった。ゾウの背中中は固くて、ズボンを通してもお尻が痛かった。その記念写真に同窓の朝鮮の子たちは写っていない。また、写っている同級生の中には、戦争で親を亡くした子もいる。人も動物も殺されることのない、動物園があたり前にある平和を、私たちは努力して守っていかなくてはならないと考えている。



8月14日(水)
神戸空襲、疎開と戦後の暮らし

小笠原 淳子さん
(1932年生まれ87歳)

1944年8月から学童疎開(集団疎開)が始まった。6年生だった小笠原さんは、次の年の3月まで8か月間、疎開生活を送った。場所は兵庫県の高等女学校。小笠原さんご自身が書いた絵をかざしながら「トイレはお墓のそば。石鹸がないので蚤・虱が衣類や頭にいっぱい。下肥運びもした」と具体的に話された。食べものは、大根めし、おかゆなどで、いつもお腹がすいていた。お手玉の中の豆、歯みがき粉も食べた。生の銀杏を食べて亡くなった子もいた。とにかくお腹がすいていた。一飢えを知らない、想像することが難しい小・中学生も小笠原さんの話を一生懸命聞いていた。



報告 ピースコンサート

9月22日(日)

名古屋二期会アンサンブル研究会による本格オペラを身近に楽しめるコンサートは、10回目を迎え130人もの観客でした。楽しい演出を交えたりし、プログラムの最後では昭和・平成の歌を観客も一緒になって歌い、会場が一つの感動に包まれました。



シリーズ
平和を守る仲間たち⑦

「平和のための博物館・市民ネットワーク交流会」に参加して

2019年10月26・27の両日、埼玉県嵐山町の「国際女性会館」で「平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会」が開かれました。このネットワークは1998年11月に第3回世界平和博物館会議に参加した日本の関係者により結成され、平和博物館の運営、平和博物館に関心を持っている方を会員とする組織です。

今年は埼玉県川越市にある「NPO中帰連平和博物館」が開催を準備、全国から46名が参加しました。うち14団体から報告がありましたが、印象的だったのは「来館者アンケートに『戦争なんてピンとこない』という意見があった。今後は映像やイラストをより効果的に使って『見てわかる展示』にしていきたい」という発表でした。

2日目は3年に一回世界各地で開催される「国際平和博物館会議」のジェネラル・コーディネーターである安斎郁郎さんのお話で始まり、来年、京都と広島での「国際平和博物館会議」への参加呼びかけがありました。

記念講演は被爆2世で元NHKプロデューサーの



永田浩三さん。「戦争と平和をどう伝えるか」をテーマに、主に広島原爆についてのお話でした。

最後に、愛知県で開かれたトリエンナーレに関して、「『表現の不自由展』に対する行政の介入と市民の脅迫的言辞に関する声明」が、「全国交流会参加者一同」の名で採択されました。

(平和のための博物館・市民ネットワーク会員
ピースあいち理事 坂井栄子)

ボランティアの窓

スピット・ファイアがやってきた!

榊山 潤



先日名古屋空港にイギリス製の戦闘機「スピット・ファイア」が飛来し、一般向けの公開が行われました。私も父と一緒に出向き、その銀色の流麗な機体に見とれました。

さて、現在の日本ではこうした兵器、あるいは軍隊関係の物と関わる機会はほとんどありません。関わることも嫌だと言われる人もいますし、平和を考えるうえで存在そのものに否定的な人もいます。

確かに武器とは、究極的に言えば人殺しの道具です。しかし、先に紹介した「スピット・ファイア」は英国では「救国の戦闘機」として人気があるそうです。またアメリカでは銃に対する根強い執着があり、犯罪が多発しているにもかかわらず、なかなか規制は進みません。他にも軍隊や武器を、愛国心に利用する国が見受けられます。つまり、武器や軍隊に対する見方はさまざまな背景で各国独特であり、日本とも違いがあるでしょう。加えて、武器が歴史的事実を語る資料となる点も見逃せません。

武器や軍隊を無くせば平和に近づく、それは一つの考え方です。一方で、それがすべての世界に通じるわけでもないようです。平和な世界をどのようにしてつくるのか、私たちはこれからも広い視点に立って考えなければいけません。

それぞれの立場でベストを尽くしたい

伊藤 真利



皆さんの座右の銘、お好きな言葉は、なんですか?私は、やはり【一期一会】Once in a lifetime experience.

私が常々思っていることは、お一人でも多くの方と出会い、お一人でも多くの方のお話に耳を傾けたい。そのひとつ「ピースあいち」での戦争体験のお話があります。たいへん貴重な時間です。戦争を知らない私達に何ができるでしょうか?いつも考えています。

私は、いろんなところで「朗読」をしたり、いろんな分野の人たちとステージを創ったりしています。「ピースあいち」のボランティアでつくる「朗読の会・オーリーブ」にも参加しています。私達表現者には、見て、聞いた事実を正確に伝える使命があります。ですから、戦争の悲惨さを正確に伝え継いでいくことが、大切になると思っています。そして、ピースあいちには、いろんな国の人々に足を運んでほしいと思います。館内の展示を見に来てもらうためにも日本の文化をあわせて楽しんでもらえるといいなと考えていたりしています。

全てにパーフェクトであることは難しいけれど、それぞれの立場でベストを尽くしたい。It is difficult to be perfect for everything, but I want to do my best in each situation.

資料館探訪 25

日本の戦争の歴史を展示——遊就館

靖国神社の中に、遊就館は1882（明治15）年、新政府軍の戦没者英霊を祭る目的で開館された。名前の由来は中国の古典『荀子』の「君子居必挾郷遊必就士」からとったものとされるが、意味が理解できない面がある。1945（昭和20）年、敗戦により廃館となる。1986年、再館され、現在に至る。

22室もあり、西南戦争から大東亜戦争に至るまでの明治以後の日本の戦争で亡くなった兵士の遺書や遺品が歴史パネルとともに展示されている。現在歴史学的に使用しない支那事変や大東亜戦争という言葉を使用して展示しているところに遊就館の姿勢が出ている。

広瀬武夫海軍中佐の像やトラトラの電文、西竹一大佐のオリンピック賞状等々貴重なものも展示されている。

大展示室には艦上爆撃機「彗星」や海軍の特攻兵器人間魚雷「回天」、ゼロ戦闘機などの実物やレプリカが展示されている。遊就館では古来や戦国時代の武器も展示されており、日本の戦争の軍事資料館である。 (N)



月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン(無料)」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください!

ぜひ「ピースあいち」の会員に!

2019年8月7日、「ピースあいち」は入館者8万人を超えました。夏の特別企画「水木しげるの戦争と新聞報道」展は大盛況、戦争体験談の語り継ぎ事業も実践しています。



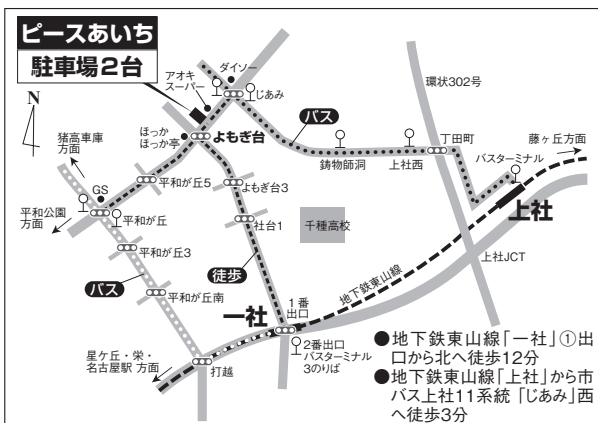
「ピースあいち」の基本財源は、入館料（大人300円・子ども100円）と会員の皆さんの年会費（正会員6000円・賛助会員3000円）です。来館者数は、開館した2007年は約12,000人、以後は6,000人前後で推移してきました。

現在会員数は878名（正会員371名・賛助会員507名）ですが、「ピースあいち」の年間経費約1,200万円には大きく足りません。不足分は不確定な寄付金や助成金に頼っているのが現状です。自主財源の確立は、まず会員の拡大です。ぜひ多くの方に会員になっていただき「ピースあいち」を支えてくださいますよう、お願い申し上げます。

【利用案内】

- 開館日 火曜日～土曜日
- 開館時間 午前11時～午後4時
- 休館日 日曜日・月曜日・
冬季休館(12月28日～2020年1月6日)
- 入館料 大人 300円 小中高生 100円
- 常設展示「愛知県下の空襲」「戦争の全体像・15年戦争」「戦時下の暮らし」「現代の戦争と平和」、
準常設展示「戦争と動物たち」「戦争と子どもたち」。ほかに、図書や戦争体験DVDのライブラリーもあります。
- 学校や団体の見学で、展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- 駐車場は2台分あります(300円)。他に障がい者用が1台分あります(無料)。

交通のご案内



●編集後記●

この「ニュース」の毎号の記事は、当館のスタッフ、ボランティアの方々が書いている。本号で執筆をお願いしたのは11人。「みんなでやる」というのが編集方針の一つである。ボランティアはおおよそ90人。開館日には5～6人が詰めていて、入館料をいただいたり、来館者の要望に応じて展示の説明をしたりしている。

四国の高知に「草の家」という平和資料館がある。このリーダーはこんなことを語っていた。「みんなでやらないと続かない。愉しくやらないと広がらない」と。本館は民設民営の資料館である。その管理運営はボランティアの方々で支えられている。 (S)